
バカとテストと最強で最強の吸血鬼

STORY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと最強で最強の吸血鬼

【Nコード】

N4053Y

【作者名】

STORY

【あらすじ】

世界最強と呼ばれる吸血鬼は文月学園2年Fクラスにいた。その吸血鬼である成瀬和樹は自分の存在は何なのか知るためにとりあえず現在を生きていく。

『……なんか、厨二病みたいな設定だな（BY成瀬和樹）』

……更新停滞するかもしれません。ご了承ください。

あと主人公は愛子とカップリングさせます。

愛子はムツツリー二と！ というカップリングを望んでいる方は読まないほうがいいかもしれません。

プロローグ

吸血鬼……それは生と死を超えた不死者の王。災厄をまき散らす最強最悪の存在　　のはず。

「だったら……このテストの問題を解決してくれ　　！」

吸血鬼……成瀬和樹は絶叫した。監督役の教師は冷静に「はい、そこ座りなさい」とか言ってくれ。簡単な数式さえ解けないのに世界最強？　……吸血鬼がナンボのもんだ。

いくら人を傷つけ、悲しませる力があつたとしても日常生活では何の役にも立たない。所詮、こんなもんか、強大な力を持ったヤツの末路なんて。

吸血鬼の定義について（前書き）

お読みいただきありがとうございます。
楽しんで頂けるとありがたいです。

吸血鬼の定義について

この作品における吸血鬼の定義について

・吸血鬼とはあくまでも『人間』であり、『怪物』ではない。そのため、魔法などは使えない。

・運動能力は普通の人間をはるかに超える。

・基本、朝は弱い。しかし、夜に強いわけでもない。

・寿命によってしか死なない。不死。しかし、自分で死にたいと思つた時は別。

・普通に腹も減るし、何かを食べないと力が出ない。

・感情を抑えるのが難しい。感情が抑えきれなくなると吸血鬼の力が暴走する。

・感情をどうしても抑えきれなくなった時は血を吸うしか暴走を抑えることはできない。なお吸血の間、血を吸われている者は性的な快感を覚える。

・十字架、ニンニクが大嫌い。

・ワイン以外の酒はすぐ酔っ払う。

・『吸血鬼は人類にとって危険だから滅ぼすべきだ』と主張する神聖防衛協会という組織と『吸血鬼は人間と共存できる生き物なので滅ぼす必要がない』と主張する共立科学連合という組織がある。

……… すいません、箇条書きで。

あくまでも「へー、こういう風なんだー」という感じで見て下さい。さして重要でもありませんから。

人物紹介（前書き）

ここでは第一部に出てくるオリキャラを紹介します。

人物紹介

名前 成瀬和樹

身長 172cm

趣味 趣味と言えるものは特にない。多才能なタイプ。

容姿 イメージとしてはソードアート・オンラインのキリト

好きなもの Fクラスの仲間たち、バイオリン。

嫌いなもの 中途半端な悪人、十字架、ニンニク、朝

特筆事項

本作の主人公。一人称は「俺」

最高の力を持っている吸血鬼であるが、その力をムダに使うことはない。自分が吸血鬼であることを隠しているが、別にバレてもいいと思っっている。

顔は優男系で、明久たちと一緒に「同性愛が似合いそうランキング」の上位に入っている。

タイプは綺麗な年上の女性。しかし、女からまったくモテない。だが、男からはモテる。

基本的にはクールだが、曲がったことがあると誰よりも怒る、熱い気質も持っている。

妹の晴香を溺愛しており、本人は否定しているがかなりのシスコン。

両親はいない。そのため、晴香と和樹の2人暮らし。

自らが吸血鬼であることで人を傷つけてしまったことがあり、そのことを思い出すとパニックになる。

勉強はできない。しかし、潜在能力は別格。集中した時やここ一番の時はケタはずれの力を見せる。

召喚獣

黒いパンツスーツにハットとコートを羽織っている。長剣を使い、身のこなしが早い。

腕輪はない。というか、腕輪をつけられるほど点数は取れない。

名前 アーロン・ナーシャ (アーニャ)

身長 170cm

スリーサイズ B93 W55 H93

好きなもの 人をからかうこと(男女問わず)
嫌いなもの 卑怯なこと、心が美しくないもの

特筆事項

本名はアーロンだが、ほぼ全員がアーニャと呼んでいる。スタイルは外人らしくかなり良い。しかし、顔は日系も混じっている。

明るくクラスのムードメーカー。

本来ならAクラスレベルの実力を持っているが、とある事情でテストでは全力を出していない。日本語がペラペラで、漢字なら明久、美波、葵をゆうに超える。

勘が鋭くとつさの判断などにも長けている。

親父ギャグなどを頻繁に飛ばしている。

和樹がただものでないと見抜いているが、詮索はしない。

本来は柔和で優しい。だが、ちゃんというときには言うタイプである。

セクハラ発言をよく発して人をからかっている。

召喚獣

魔法剣士タイプ。服装はローブを着こみ、その下には鎧を着こんでいる。武器はライトセーバーみたいなものでキレ味もいいし、耐久性も抜群。体術もうまい。

腕輪は運動神経を上げる効果。

人物紹介 その2 (前書き)

前回に引き続き、オリキャラを発表します。

人物紹介 その2

名前 黒崎楓

身長 167cm

容姿 イメージで言うと恋姫・夢想の紫苑。

特筆事項

成瀬和樹、晴香兄妹の後見人。

数少ない吸血鬼の存在を知っている。実は政府関係者であり、和樹が暴走したらすぐ殺せるように、命令を受けている。なお、そのことを知っているのは和樹だけ。

だが、基本的には和樹に同情的であり、しばしば相談に乗ってあげている。

優しく思いやりのある性格だが、『おばさん』など年齢になる話題だと笑顔のまま怒って、誰にも手がつけられなくなる。

名前 成瀬晴香

身長 160cm

容姿 イメージで言うとハヤテのごとくのヒナギク。

特筆事項

成瀬和樹の妹。双子である。

文月学園のAクラスに所属している。成績も翔子、久保ほどではないが点数はすごく高い。

剣道をやっており、実力はトップクラス。

家事全般できる。

第1話

人は誰しも、何かを隠して生きていかなければならない。
それは和樹たちみたいに一見平凡そうな家族にも言えることであ
った。

「ほら、お兄ちゃん！ さっさと起きて！」

「……あと5分」

「ダメだつてっ。お兄ちゃんが遅刻して、廊下に名前を貼り出され
ると妹のあたしが恥書くんだから！」

そういつて晴香は強引に和樹の布団を引きはがしてくる。

「早く着替えて学校行つてね、サボらないでね、あと朝ごはん作る
の忘れてたから台所にあるやつ食べてね、じゃ部活の朝連あるから
行つてきまーす！」

晴香は要点だけを早口でまとめて家を出て行った。

(……我が妹ながらハイテンションな奴だ)

和樹がそんなことを考えていると、いきなり背後から艶っぽい声
が聞こえた。

「……どうやらお疲れのようね、成瀬和樹くん」

条件反射で背後のほうを素早く振り返る。すると、そこには和樹
と晴香の後見人である黒崎楓の姿がいた。

「楓さん……。インターホンも鳴らさずに入ってくるのやめてもら
えませんか？ びつくりしますから」

「あら、面倒を見てくれるお姉さんに対してずいぶんな口のきき方
ね。……それともあれ？ 昨日、私が夜、寝させてくれなかった
から怒っているのかな？」

楓は和樹に顔を近づけながら、コケティッシュに笑う。和樹は頬
を真っ赤にしながら、派手に椅子から転げ落ちる。

「ひ、人をからかうのもいい加減にしてください！ あなたが一番
知ってるでしょ、そこらへんの事情は！」

「ふふっ、冗談だつて。もちろん、分かっているわよ。……あなた
が吸血鬼ってことは」

それまで笑顔を浮かべていた顔つきを急に变え、楓は冷静に言い
放った。

第2話

「……ま、吸血鬼って言っても、特別な力なんてほとんどありませんよ。魔法も使えないし空も飛べない。少し変わっている普通の人間……」

「そう」

その言葉を言い終える前に、楓は隠し持っていた拳銃を和樹に向かって打ち込んできた。和樹は素早く、イスを蹴飛ばし弾丸を素手でたたき落とす。

「……何をするんですか、いきなり」

「特別な力なんてない、普通の人間が銃の弾丸を素手でたたき落とせる？ 和樹クン、あなたは自分の持つている力をずいぶん、軽く見ているみたいね」

「……黙ってください」

「いい？ あなたは下手な軍事兵器より危険な存在なの。私たちの監視下に置かれていているうちはいいけど、もしこのことが良からぬ考えを持った人間の耳に入ったら……」

「黙れって言ってるだろう！」

和樹は楓の声を打ち消すように大声でわめいた。楓はふう、と大きくため息をつく。

「……ごめん、少し言いすぎた。別にあなたが吸血鬼になりたくてなったわけじゃないもんね。私たちの方でも、和樹クンを普通の人間に戻せるように研究を進めているから」

「……できるだけ早くお願いします。俺はこんな無意味な力、さつさと捨てて普通の生活に戻りたいんです。……もう遅いかもしれませんけど」

「うん、担当者にも催促かけておくから。新学期始まってそうそう、こんな話してごめん。……がんばって」

その言葉は決して優しい響きではなかった。だが、中身が詰まっ

ていない上っ面だけの優しい言葉よりこの言葉のほづがすすきり聞
こえる。

……ようやく手に入れた平和な生活。もう失いたくない。

第3話

「10分遅刻だぞ、成瀬」

「すいません、西む……鉄人」

「悪化させるな！」

朝っぱらから怒鳴っているのは生活指導の鉄人大先生だ。真面目で悪い人ではないんだが、いかんせん暴力好きだ。

「それよりも成瀬、俺に言うことがあるんじゃないのか？」

「……あ、そうですね。今年は中日ドラゴンズがセ・リーグ制覇しました」

「お前は遅刻の謝罪より、今シーズンのペナントレースの方が大事なのか……？」

大事だ。大事に決まっているだろう、落合監督が今季いっぱいはやめるんだから。

（作者注 今回もマニアックなネタを多数放りこんでいきます。分からない人はググってください）

「まったく……少しは妹を見習え。礼儀面でも勉強面でも。妹がAクラスで兄がFクラス。お前にはプライドが無いのか？」

「無理です。晴香は晴香、俺は俺。俺は自分の生き方を貫き通します。それとプライドなんてありません。名誉なんて金にもなりませんし。あと一つ。俺は遅刻はたびたびするかも知れないので、いちいち目くじら立てないでください」

「偉そうに遅刻を予告するな！ お前は『遅刻した自分が悪い』という自覚すらないのか!？」

鉄人は早口でまくしたてた後、和樹に茶色の封筒を渡した。

「……なんすか、これ？」

「先日行われた振り分け試験の結果だ。ちなみにお前はFクラスだぞ。いいか、Fクラスだからといって、だらしない生活をおくるなよ」

鉄人はそう言って、校門を去っていった。どうやら、和樹に小言を言うためだけに立っていたらしい。ご苦労なことだ、まだ人生棒に振る年齢でもないのに。……棒に振らせている張本人、和樹ら問題児が言っても説得力はないが。

第4話

「おはよう、和樹」

玄関にて靴箱から靴を取り出していると一年生からの付き合いである吉井明久が話しかけてきた。和樹も笑顔で挨拶をかわす。

「ああ、おはよう。それで……どうだった、クラスは？」

「Fクラスだよ。十門に一問は解けたはずなのに……」

「……それ解けたっていいのか？ ……それにしても甘いな、明久。俺は禁忌の方法まで使ったというのに……」

「き、禁忌の方法って？ それってまさかカンニン……」

「聞いて驚くなよ、俺は……全部解答容姿に『イ』と書きこんでやっただぜ！」

「な、なんだって!？」

……すごく低レベルな会話、という声がどっかで聞こえたような気がするが、2人はその言葉は聞こえないふりをする。

「おかげでテストは10分で終了。余った時間は睡眠に費やした。

四問に一問は当たってる計算。これでFクラスどころかAクラスも夢じゃない!」

「すごい！ すごいよ、和樹！ で、結果は？」

「Fクラス」

「……」

「……」

あっという間に葬式モード。ひゅ〜、と切ない風が流れる。

第5話（前書き）

お待たせしました、和樹が相当の変態ということ、実はおもしろいんだ、ということはこの回で分かっていただけだと思います。少しでも、この非現実的な設定を近くで見ただけだったら嬉しいです。

第5話

遅れついでにAクラスでも見ておこう、ということでは和樹と明久はAクラスをのぞいていた。

「そう言えば妹さんもAクラスだったよね？ ええと……晴香ちゃんだったけ？」

「ああ、そうだ。……言つとくがお前、晴香に手を出したらで殺すぞ……冗談抜きに。フラグ立てしようとした時点でキサマのはらわたを食いつくしてやる」

和樹の相変わらずのシスコンぶりに明久は顔に手を当てて呆れる。「……ねえ、和樹。晴香ちゃんが心配なのは分かるけど、そんな過保護になることもない……」

「何を言う、バカ明久！ 晴香は世界3大美女よりも美しい！ 俺にとつて晴香はエンジェルだ！ あと、お前みたいな男が晴香を呼び捨てで呼ぶな！ けがらわしい、晴香が汚れてしまったらどうする！」

「和樹……。今の君はド変態にしか見えないよ……」

「……絶望した！ 妹を思う家族愛ですら変態とみなす友人に絶望した！」

「アーウト！！ それはアウトだって、和樹！ 講談社だよ、相手は！」

（作者注 元ネタは『絶望先生』です。講談社コミックスにお勤めの関係者の皆さま、大変申し訳ありませんでした）

「ふふっ……」

突然、明久が笑みをこぼす。和樹は意外そうな顔を浮かべる。

「ど、どうした、明久？ やめる、俺はBL属性なんか持ってないぞ」

「いや、そうじゃないよ。和樹、最初に会ったときは無口で無愛想だったから」

「……………ああ」

和樹は一年前のことを思い出して、顔をほころばせる。確かに一年前は吸血鬼になったせいで、人とかかわり合いを避けていたような気がする。もう誰も傷つけないように。……………そして、誰にも傷つけられないように。

だが、どこにでもおせっかいな人間はいるらしい。長い間、一人でいた和樹を見かねて明久たちが話しかけてきたのだ。

それから、和樹はみんなに迎えられるようになった。明久たちほどではないが、仲がいい友人も増えた。……………ちなみに晴香目当てで『義兄さん!』と呼ぶ連中はみんなぶつ倒した。

そんな和樹も一つだけ言っていないことがある。……………無論、自分の正体が吸血鬼だということだ。そのことを知られたらヤツらと築いた関係は瞬く間に崩壊していくだろう。

それだけは嫌だ。

一人ぼっちにはなりたくない。

もうこれ以上……………自分を信じてくれた人を失いたくはない。

……………それは薄っぺらい関係かも知れない。友情なんかじゃないかもしれない。でも、それでいいんだ。そろそろ、十字架を下ろしたい。。。

「行こうか……………いつまでもこうしていても仕方がない」
「そうだね」

和樹と明久は自分たちが行く教室へと歩き出した。

第5話（後書き）

……すいません、また着地点がおかしくなりました。最初はコメ
デイのつもりだったんですが……。

第6話

「スイマセン、遅れちゃいました？」

「同じく！ 俺も遅れちゃいました？」

「とつとと座れ、ウジ虫野郎ども！ てめえらのサービスショットなんか誰も見たくねえんだよ！」

悲鳴のように声を荒げているのは和樹と明久の友人である坂本雄二。頭は切れるが、いかんせん性格がマジで悪い。

「……………雄二。この世にはマニアというものが存在する」

「おい、ムツツリーニ……………。汚いものを想像させんでくれ……………」

にやりと笑ったのは土屋康太こと、ムツツリーニ。本人は隠し切れているつもりみたいだが、実はかなりのエロだっことは2年生全体に知れ渡っている。

「やれやれ……………。お主らは朝っぱらから元気じゃのう……………」

ふう、と小さくため息をつくのは木下秀吉。可愛い女の子……………もとい、可愛い秀吉だ。（無論、性別のことを指している）

「……………和樹。お主、3人称で失礼なことを述べていなかっただか？」

「気のせいだ、秀吉」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4053y/>

バカとテストと最弱で最強の吸血鬼

2011年11月20日19時12分発行